

「当事者」からの視点

昨日レポートした『現代思想』10月号「緊急特集 相模原障害者殺傷事件」のなかで、表題の一つ、神経筋疾患ネットワークの中尾悦子さんの論稿を紹介する。

あの事件から、ひと月が過ぎました。事件直後には、新聞やテレビで盛んに取り上げられたものの、その後にやってきたオリンピックや有名アイドルグループの解散やらにかき消され、何事もなかったように日々が過ぎて行きます。今では、あの事件は、人々の記憶に

少しでも残っているだろうかと不安に思うほどです。世間は、他人事の見方で事件のショッキングさを語り、さんざん刺激を消費して、飽きた頃に別の面白い話題が見つかったので忘れ去る、そういう構図に見えます。

では、なぜ、多くの方は、障害者の問題を他人事としか思えないのでしょうか。

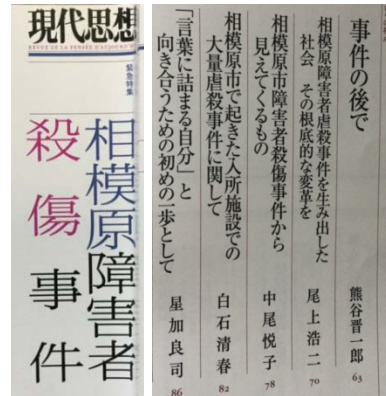
まず、考えられる理由は、分離教育です。障害者と健常者は、子どもの頃に知り合っていない。知らない人のことを想像するのは、誰にとっても難しいことです。子どもは遊びや生活の中からコミュニケーションを学びますが、共に育つ機会が奪われたことにより、お互いのコミュニケーションの方法を獲得できなかつたと考えられます。

大人になっても、分離は続きます。地域で当たり前前に暮らすための、十分な介助が得られないために、障害者は施設や家の中に閉じ込められます。そして、ますます知らない人になっていきます。大人は、子どもよりも知らない人に近づくことが苦手です。経験によるブレーキがかかり、間違った近づき方をしていないか、失敗しないかに敏感になってしまうからです。

障害者に近づくと心が乱されることも、近づきたくない理由かもしれません。単純に、他者として、テンポのずれを受け入れるのは面倒なことです。あるいは、「迷惑をかけてはいけない」と言われて育ち、助けを求められない人たちは、助けられながら生きる障害者を見ているだけで腹が立つこともあるでしょう。

障害者の置かれている状況が悪すぎて、他人事にしておかないと耐えられないということも考えられます。この社会では、障害者はあからさまに差別を受けており、十分なサポートを得られていません。それを見せつけられるので、自分が障害を持つことなど想像もしたくないし、自分の大切な人が障害を持つこともつらくて見ていられないのかもしれない。さらに、能力主義のこの社会では「できないこと」そのものが恐怖となります。「できない」自分になることを考えたくないのも無理はありません。

このように、人々が、障害者のことを他人事だと思ってしまう、あるいは思っておきたい理由がたくさんあります。だからこそ、放置していたら、この問題は解決すること



がないのだと思います。この状況を少しでも改善するために必要なのは、具体的な行動です。まずは、国が、教育や介護保障のシステムを変えて、どんなに重い障害があっても地域で学び生きられるようにすること。そして、一人一人が自分の中の意識を変え、小さくても良いので、何かアクションを起こすことが解決への道ではないでしょうか。

「当事者」からの視点として、こころに迫る指摘が多い。障害者の問題を他人事としか思えない理由として、「分離教育」をあげている。ともに学ぶ「インクルーシブ教育」が叫ばれているが、「分離教育」の流れは根強いものがある。

重い障害をもつ児童が普通学級で元気に学び、クラスのなかで「居場所」をしっかりと確保しているのを、この3年近く身近に見てきた。名古屋市立堀田小学校に元気に通う、5年生の林京香さんだ。「京ちゃんを光に」、私なりに学んできたことを、これまでも書いてきたが、これからもレポートしていきたい。

(2016年10月7日)